

大地

第 37 号
2011.5.10. 発行
浄 國 寺
上 飾 刊 3 月 14-10
☎025-523-5724

母の最期と遺してくれたこと

山崎 慎子

いつの頃からか義母は「死ぬ時に苦しいのはヤダなァ、痛いのもヤダなァ」と口にするようになっていた。そんな時は「大丈夫、お母さんは心臓も悪いし、私には介護能力も看護能力もないから、きっとスーッと逝けるよ」と半ば本気で半ば無責任に答えていた。

九十を過ぎた秋に体調を崩し始め、腸閉塞や骨折その他で、度々救急車のお世話になり、しかしその都度回復を果して、ヘルパーさん達には「不死身の睦さん」とささやかれていた。

この五年程は母にとっては不如意な歯がみするような日も多かったに違いないのだが、大正生まれの本領を発揮して、福祉や医療、周囲の人々に見守られながら、精一杯に生き生きり、そして、まさに大往生という最期を私達に遺してくれたのである。

亡くなる前日も、多分相当しんどかった筈

なのだけれどデイサービスに行き、夕食も私達三人で一緒に食卓に向かった。それまで食事介助をすることはなかったのに、その日は私達二人が交代で母の口に食事を運んだ。献立は、おかゆに梅干し、煮物三種を細かく刻み、ホーレン草とはんぺんの卵とじ、時折、「おいしい」と言いながら用意したものを全部食べ、大好きだったイチゴも二粒食べた。最後の晩さんである。

家人が早々に部屋に送って行き、少し首をかしげた。いつもと様子が違うと言う。誰かが来た幻覚も見ているという。

翌朝、朝食を一緒にとるのは無理と判断し定番の自家製ヨーグルトにバナナやイチゴ、ハチミツを混ぜたものを、時間をかけて一サジづつスプーンで運んで上げる。でもたっぷりと食べる。

朝からずっと目を開けない。飲み込む力はあるが吸い込む力は落ちてしまっている。

昼食はあきらめて、二時ころ柚子湯をスプーンで運ぶ。目は閉じたまま。それでも百五十CC程を飲む。「おいしい？」と尋ねると、うなずく。これは年末に帰省した娘が温まるからとお土産にくれた京都・和久傳の柚子湯である。これがハイカラさんだった母にふさわしい末期の水となった。

ヘルパーさんが訪問して下さる。「やっぱりいつもと違うね」と話しながら枕元で見守

る。

その日来てくれたヘルパーさんには三人のお子さんがいて、お兄ちゃんが十八才、お姉ちゃんが十六才、末の子は六才。末の子がお腹に入った時、彼女はためらって、仲間に相談したときのことを話してくれた。そろそろ自分の時間もほしいし、産むべきかどうか、と問う彼女に仲間は「産まずに後悔した人は沢山いるけれど、産んで後悔した人はいないよ。何とかなるから産みなさい」三番目の子が生まれると、兄、姉がこの上なく喜び、二人して名付け親になったこと。登下校には、まず弟に挨拶し頬ずりしていたこと、思春期の今でも弟を慈しんでいること、そして終わりに彼女は「末っ子は我家の光です」と満面の笑みで話してくれたのである。

母の息ざしが荒くなってきた。熱を計ると八度九分、往診をお願いする。午後休診の日にも拘わらず、来て下さるとのこと。

ヘルパーさんが「渡辺先生が来て下さいますからね」と声をかけると、「ハイ」とうなずく。それが私の聴いた母の最後の言葉（声）である。

往診していただき、ホッとしたのも束の間夕刻に急変し、家人と私、お願いしていたケアマネージャーさんが見守る中、母の息は静かに穏やかに止まってしまった。

〈2頁へ続く〉

へ1頁からの続きへ

耳の機能は、人の器官の中で最後まで残っているという。母はきつと薄れていく意識、いのちの底で、ヘルパーさんの素敵な話を聞いてくれていたに違いない。これも確かに、いのちのバトンタッチのひとつの形なのだと教えていただいた。

穏やかに息をひきとった母の死顔は、四十年近く共に暮らした中で最も美しく、棺が火葬場の釜の中に入っている寸前まで唇はピンク色を帯び、微笑しているようにさえ見えた。

私にすれば介護に後悔がないはずはない。けれど、母の最期の在りようが、全てを包み込み満足しているふうだったことに慰められている。

お母さん、ありがとうございました。
またお会いする日まで。

九十五歳と九十四歳

北本町三 横関 レイ子

浄国寺の大奥様と私の義母は一歳違いでした。それでうちではよく「お寺の奥さんの方が一つお姉さん」と話しておりましたが、大奥様はこの二月に義母は四月に亡くなりました。

義母は長年柏崎市で一人暮らしをしていましたが、八十六歳の時にアルツハイマー症と診断されました。その後、非常に運よく高田の施設に入所することができ、九十四歳で老衰で亡くなるまでずっと手厚い介護を受けてきました。

義母が高田へ来たため、私達夫婦は柏崎の家を処分することになりましたが、合わせて菩提寺の問題も解決しなければなりませんでした。実は義母にある事情があったため柏崎のお寺とは疎遠になっていたのです。しかし、勝手にお寺を愛する訳にも行かず、やはりお寺のことは、お寺に聞いてみるのが一番良い方法だと思いました。

その時、相談にのって下さったのが浄国寺の大奥様でした。当時はまだお元気で、私の実家の月参りにもいらしていました。大奥様は、私達の話を聞き的確な指示を与えて下さいました。おかげで柏崎のお寺とは正式に手続きを済ませることができ、その上私達は浄国寺に新しい檀家(門徒)として加えていただくことになりました。

大奥様が亡くなったという知らせを受けた時、主人はお通夜に私はお葬式に参加するつもりでおりました。ところが、その後病院に行った私は肺炎の一手手前という診察結果を受け、外出もままならなくなってしまうました。私はお世話になった大奥様のお参りにも

行けずじまいで、そのことは今でも大きな心残りとなっております。

義母の通夜の法話の中で浄国寺様は「横関敬子さんが何を残されたか皆さんで考えてみて下さい」と言われました。私の友人が後日お壇参りに来てくれましたが、彼女達はみなうちの事情を知っていたため口々に「お寺を早めに決めなくて良かったね」と言っていました。本当にその通りで、義母が残したものの一つ、それは浄国寺とのつながりであったと思っております。

認知症になる前の義母は、自分が高田のお寺のお坊さんにお経をあげてもらおうことになるとは夢にも思っていなかったと思います。しかし、義母の葬儀は家族葬で行なうと前もって決めてあり、すでにお寺との付き合いもあつたため、私達は母の死にも穏やかに向き合うことができました。

大奥様と義母、共にほぼ一世紀を生き抜いたその人生を思う時、私達は不思議な縁につながって生かされていると、改めて考え直させられる毎日であります。

第10回 川島昭恵語りの会

◇日時 五月二十一日(土) 午後七時

◇場所 浄国寺 寺町三丁目十四

初夏の夜、夢の拡がる童話の世界へ!

※入場無料 大震災の義援金をお願いします

親鸞聖人七百五十回

御遠忌法要参詣記

水戸市 西山雄七郎

なにしろ五十年に一回行なわれるという御遠忌法要に、このたび勇躍して参加した。浄土真宗の研修、本山など名のある寺院の見学など、日ごろとくに個人的にはなかなか実現しがたい事がらなので、プランをきいたとき即座に参加を申し出たことだった。

高田を出発したのは朝の七時過ぎ、老若男女を乗せた観光バスは一路高速道に入り、係りの方々の挨拶や配り物などで次第に参拝ムードがたぎよう。「若」というのは一人のかわいい小学生。市内寺院の子供さんである。なんでも五十年後の八百回御遠忌には関係者の意を体して、無事に役目を果してもらいたいとの親の願いがかかっているという。こんなところにも当法要のいきの長い歴史が知らされる。

最初の見学箇所は長浜別院大通寺。かつて真宗王国と呼ばれた湖北三郡の中核であった「長浜の御坊さん」である。されば別格別院として七千坪の境内、名実共に信仰とその伝道との要である。本堂・阿弥陀堂は重文に指定され、もと伏見城の殿舎であったという。

午後は野洲市の本山錦織寺の見学。中心なる所に御影堂、そののさらなる脇に阿弥陀堂が並び、ご本尊の阿弥陀如来が安置されている。その由来は霞ヶ浦（常陸・茨城！）で感得せられた一尺八寸の木像の坐像と言う。親鸞が越後を後にした常陸の国の水底から引き上げられたというのも何かの因縁であろう。

さらに「満足の御影」があるのも当寺の誇る財産の一つである。『教行信証』の「真仏土の巻」などを当寺で述作されたと伝えられるその浄書完成のお歎びが描かれているのである。

初日の宿は京都市内、西山が「東山閣」に泊る。ビール・酒など、みなさんのみもの不足はなさそうで、それぞれ京での半世紀の奇遇をたしかめ合った。

二日目の四月二十二日は、いよいよ本番の法要だ。東本願寺には八時過ぎに到着したが、なにしろ京都の中心街、ラッシュアワーと観光バスの長い列で、下車後のジグザグ行動が続き、ようやく御影堂の指定席に腰かける。広い堂内一ぱいに椅子が置かれ、何百という善男善女が静かにかしずいている。かくも広い屋内で、かくも大勢が腰かけての行事挙行は初めてである。

本山門首による「表白」という名の挨拶が始まったのは九時、言葉はやや聞き取りづらかったが、この方が大谷派最高の生き仏に近

いお坊さんなのであろう。かくて予定通り法要の各項が進んだが、中でも同朋唱和による正信偈の音読は良かった。真宗が今日のように大きな教団となったのも、このような僧・俗一体の念佛活動がその支えの一つになっていることだろう。

大勢の坊さんが一段高い内陣に向い合っている正座、この人達の発する大音声、キリッとしまっていて耳に心地よい。参拝する私の心の中では、半世紀に一回という「千載」とまではないかなくてもこの一隅に居合わせる幸せを想うのである。曾我量深師の説かれる「莊嚴の世界」というのはこういうことなのかと思案されるのである。一心の落着きと充実！この壮大な御遠忌は正午近くに終わった。

〃入るに難ずるに出でるも難い〃越後勢は殆ど最後尾に会場を退出し、団体集散広場に出た。バス待ちというので、すぐに前の書籍店に入る。直ちに目についた『往生極楽の道』（金子大栄著）を求めた。奥まった分厚い文献コーナーに『増補親鸞』（松野純孝著 東本願寺）も見られた。

越後には名利もいくらかあるが、それにもまして碩学も輩出していることを再認識させていただいた法要であった。（四月二十八日）

如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も骨をくだきても謝すべし

（親鸞聖人と讃）

感謝申し上げます

山崎隆昌

釋尼明浄（山崎睦）の命終、つづく葬儀に際し、檀信徒の皆様、さらに故人にご縁のある多くの皆様から、温かなお心配りを賜り心より御礼申し上げます。お蔭様で、去る四月二日には満中陰法要を営みました。急場のこと、葬儀等のお知らせをできなかった檀信徒の皆様にお詫び致します。

まもなく百ヶ日、東日本大震災のこともあり、いまだ心の整理がつかず、何かしら落ち着かぬ毎日を送っております。

〈夜の雪も朝の光にとけそめぬ 睦〉

命終わる一カ月余り前に詠まれた最後の句。夜雪の朝、白く化粧した庭に淡い冬の光が差す情景を、母はどんな気持ちで観ていたのかと今にして想うのです。

今後、皆様とのご縁がさらに深くなることを願っております。ありがとうございます。合掌

犬の散歩



山崎隆昌

「早春、満開の桜の木の下を二匹の愛犬と散歩する」など、小説にでも出て来そうな情景だが、我が家の散歩はとんでもない様で、恥ずかしいやら、腹が立つやら、困惑するや

ら、笑ってしまうやらで、小説よりも奇なりである。

二匹のパグ犬は、おっとりで病気がちの蓮（れん）が十一才、若くエネルギーの塊のような華（はな）が四才。同じ犬種でもこれほどまでに違うのかと驚くばかり。

早朝、二匹にハーネスを着け、リードをつないで（この時は二匹とも嬉々としている）おもてに出る。ところが、いよいよである。

蓮公の方はゆっくりと、のそのそと歩き、散歩あるいは止まる、また歩いては止まる。一方の華公は、跳ねるように軽やかに前へ進む。二本のリードをつかむ我輩は、右手は前を行く華に引かれ、左手は歩いては止まる蓮を引く。早朝で人に出会うこともあまりないが、自らの格好に可笑しくなる。

散歩はおよそ二キロのコース、浄國寺の門を出て表寺町通りに向かう、表寺町まで距離にして二百メートルほど、この間は蓮の抵抗が強くて遅々として進まない。情けなくてくそったれと思うが、人の顔をじっと見上げる蓮公を見ていると「仕方がない、ゆっくり行きますしょうか」となるのだ。

表寺町を南に上り、踏み切りを超えて高田駅に出る。改札口を右に見ながら、雁木風の駅通りをぐるりと回る。しかる後は、東方にコースを取り本町通りに向かう。

この辺りから、蓮の歩き方が違って来る。

のそのそと立ち止まり歩いてきた同じ犬が、軽やかとは言えないまでも、スタスタと華の後方を歩く。この違いは何だと呆れるばかり考えるに食いしん坊の蓮の頭の中には、往路と復路の見定めがあり、復路にかかると散歩の後に出来る朝食が目には浮かんでいるに違いないと邪推する。ちなみに往路では手を焼いた最後の二百メートルが、瞬時の通過だ。

玄関に入り、足を拭いて上がると待望の朝食。今朝の散歩も無事終了となる。

散歩の度に、前後に引かれながら歩く我輩としては、犬語が話せるなら二匹に特に蓮公様に、胸の内にあるやるせない気持ちを聞いてみたいものだ。

けれども、それは人間の思い上がりだろう。なぜなら、犬の生活は全て飼い主である人間が決めており、犬には選択の余地は無いのだから。犬は黙して（鳴くけれど）飼い主に従うのみ。それを飼い主は、自分の考えに当てはめて、犬達が喜び満足していると勝手に思っている。

もしこれが人間同士ならば、相手から手痛い反撃を食らうことになるのだろうか。あるいは関係がぎくしゃくすることになるかも。

さて、明日もまた二匹と散歩、引っ張り、引っ張られ、それもまた楽しいものだ。

早春、満開の桜の木の下を二匹の愛犬と散歩する。